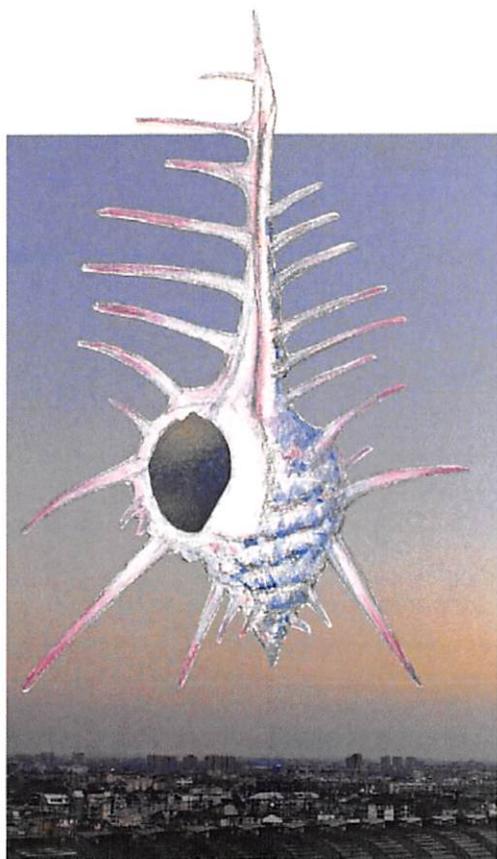


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020. 6



令和2年6月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第6号

No.745

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二〇年 六月号 (通卷七四五号)

◇今月の二十首詠……いのち―境内の古木を巡る挽歌 金近敦子 2

■作品A

神田鈴子・菊地栄子他 4

A 海保奈良繁他 24

B かがわじつお他 52

C 鍵田朋美他 66

A 中西淳子他 80

■オリープ集 宇井秀雄・植月弘子他 44

◇今月の二人 もりやまきょうこ・江尻リエ子 40

香川進の生きものの歌 田土成彦 14

私と短歌との出会い (214) 植月弘子 43

《特集》阿藤たつる あつらカルト

短歌 ラストシーン 15

エッセイ ほくはこんな音楽を聴いてきた

作家論 風の遺言 ―土方 巽

◇シルクロード・カフェ ―― [責任編集] 木村文子 50

■遊覧寄港へ「好奇心」未知の事柄に対する興味 藤川淳子 23

■歌壇月旦 西堤啓子 71

〔感情史〕としての短歌

■四月号作品批評 72

A……………浜谷久子・横田敏子

玉井綾子・須川千恵香

B……………中山真弓・茂木 斌

C……………滝田靖子

オリープ集……………もとむらしげと

今月の二人・作品評 久我田鶴子 42

最近の歌誌より [編集部] 65

クリップ……………表 96 神田通信……………表 93

(表紙デザイン) Tazuko Kyga

いのち — 境内の古木を巡る挽歌

金近 敦子

抜け殻は直径三寸程ありき。主は何処に、緑の蝸牛よ

アンモナイトの大き化石のごと見ゆる蝸牛の抜け殻よこたふ地面

銀鼠の雨は洞より降り込みぬ龍鱗の松の内なる樹皮へと

芯のなき老松の内の洞の壁蝸牛は静かに上がつて下りぬ

洞のうち闇に漏れくる秋の陽に貪るやうに眠れる蝸牛

いちひきの蝸牛ぬめぬめ老松の洞にて古りぬ幾百年も

雪はいま洞へと吹き込み積もりゆく積もれる雪に護らるる松

古き松の枯れゆく様を見る今も蝸牛の歩みを残す銀筋

昂グループ（広島）所屬。

第一歌集「春夏秋冬」

第二歌集「東から西に」

テイベアものがたり

青嵐吹き初むる午后かたつむり、角吹かれをりミツキの幹に
幾百も幾千もの花ひらくミツキの巨木のまとふ静謐

純白のはなびら君の肩に降り、遠く見知らぬ街角に降り

ハナミツキ死者多ければ花多く弔ひのほむらを点す花かけ

霜に雪四月の花は耐へに耐へ奇跡の如くにひらく純白

花水木はじめて朱の実つけし年きみは生まれき風の九月よ

初孫を父はあたらしき家に抱き螢のぼうと舞ひゆきし山辺

皐月十日余り二日に父逝きぬ典雅なる微笑み父は残し給ひぬ

その雨に白き花びら散り敷いて父の棺は参道を来る

ハナミツキの白きハートの花びらの幾百幾千舞ふ石畳

敷石にハートの花びら張り付きぬ小雨の通夜のアプリカシオン

雲間より光の束の届きゐる境内に散りし零れ松葉よ

作品 A

神田 鈴子

マスクと桜

・大

水玉のガーゼのマスク届きたり友の手縫ひの針目やさしく
 備蓄なく外出控へしわがために贈りくれたり心も共
 うつかりとマスクを忘れ咳き込めばバスに人らの視線を浴びぬ
 コロナ禍にオリンピックは延期さる焦点合はせし人らの思ひは
 お花見を諦めテレビに見入りつつ疎水の桜をなほも恋ほしむ
 咲き初めし桜の色も盛り帯びマスク姿の人はまばらに
 休校に子らの声なき校庭の桜はひっそり満開となる

菊地 栄子

平常心

・湾

欠点か弱みか綻び見てしまう言いえざりして寂しきものを
 両の手に提げている野菜の重たさよ耐えつつあれど悲しみはなし
 ぼつりぼつり濡らして来た冬雨の雨帰るさの道また降られけり
 不注意の傷の手当をしてくるる人の情を頼みそめたり
 青空を背に立てる裸木に鈴生ることし群れなす雀
 目標の歩数果たせば現し身を解き放ちたき夕暮せまる
 今ならば躊躇いもなく肩寄せん平常心の友が懐かし

木村 文子

春模様

・羊

わき腹を穿たれし魚は暗渠にて渦巻く水に花と流れる
 雪の上にまたねと書いてひそやかに卒業をする今年の子らは
 縦縞の布を裁つとき手に重い鉸は素直な音をたており
 縫いあげた立体マスクにアイロンをかければほんのりさらし香りて
 毎朝の最大呼気流量の安定を楯とし風邪の町へいでゆく
 様々なかたちの眠りより覚めて樺の林に早い春来る
 渦巻きしみずは鎮まりさやさやと鴨を浮かべて午後を歩みぬ

草刈 十郎

寒夕焼

・世

老幹に力いつばい咲く梅の源の一字を彷彿とさす
 けふ啓蟄地上の異変知らぬまま地虫目覚めて戸惑ひをらむ
 西海に寒夕焼の薄れゆき余命たしかに削られゆけり
 着ぶくれて冬日をひざに乗せしまま老いは齒のなき口あけ笑ふ
 老いひとり沈黙に座す日溜りに春の気配の漂ひてをり
 コロナウイルス感染拡大マスクして徒ならぬ世となりてゆくなり
 女高生の編みゆく毛糸帯を経て恋が形となりてゆくのか

國井節子 春愁

・春

中国が原産といふ牡丹の花くらき世相の最中に咲きぬ
東塔の落慶法要早くより準備し乍らすべて空しき
渡り来て池に群なす鶴鳥の白いマスクのごときくちばし
本性を見せぬ敵から身を守る救世主とも白いマスクは
世界中コロナコロナと騒げども山野は花の真つ盛りなる
遠き日に近江の人にいただきし鑑草の花庭に増えたり
もりもりと金木犀の芽は伸びる危ふき病の流行る春にも

河野繁子 たたかい

・雁

むつかしき舵取りせまられ国々の手腕さまざま新型コロナ
明け方のうぐいすの声ウィルスの混乱みゆる今日が始まる
映像のスイッチ切ればしんとして窓より見ゆる雉のすなどり
頂上の一木とらえて拡大すひと葉添わねばタムシバと知る
山肌に白きうること咲き盛るタムシバ農の節目知らせり
公民館の活動中止とひきかえすパードウオッチングのなき家ごもり
「だましましたし付き合いますよ」と歯科医いう体の部品みんな頷く

小西美智子

花冷え

・大

花冷えの昼をいゆけばほろほろと花びらの散る歩む肩のへ
うす紅の金魚草を瓶にさすせめて屋ぬちの気をやわらげん
ローランサンの少女の頬の浮かびくるマーガレットのうすももいろに
新型のコロナウィルス恐れつつ籠れば花に心いやさる
シャンゼリゼ人影もなくウィルスに侵されゆきて色を失う
西部劇の塵墟の町よぎるときざざわとして心冷えゆく
スペイン風邪に逝きし母君をなげきける少年の日の先生あわれ

小林能子 いま

・羊

傷む目を癒す最後のすべとして再び受くる毛様体冷凍凝固術
見ゆる目にならぬと知れど幽かなる光をもとめ術に委ねて
痛め止め効かずよろよろ起き出す明けの鳥の騒きたつ刻
日の温み鎮もる「銀杏と百舌鳥」を描く画伯は失語の壁を超えきて
リハビリに習作重ね描かれし「白頭鳥」にいま援かる力
ゴミ出しは月木金土（横浜3R夢）団地にひとり暮らしを維持す
廃棄物処理計画市民の暮しに根づきたるこの横浜にカジノは要らぬ

近藤栄昭

コロナ

・虹

腫げにコロナは姿あらわしぬ年寄りの肺を食べるが好きと
黒まだら流行病の病原体コロナは燃えて赤きに変わる
一人乗るエレベーターのドア閉まる触れあいなきに安らいでいる
二Mあいだを開ければ罹らぬといつもより長いスーパールのレジ
買い置きのリストにマスク記載なしよくある狼狽おろおろの日々
動くもの見れば引かれて元気でる横断歩道の点滅信号
空狭くすばまりてゆく高崎線地下にゆくがに今日は東京

近藤芳仙

ローマにて(三)

・信

土砂のけて発掘されしは今世紀古都アンテーカーの街にちかづく
二千年前の街跡 浴場のモザイクタイルが陽を照り反す
長年に風化のすむ煉瓦の街いつから住むや蜥蜴が走る
赤煉瓦にうめつくされし街跡は神祭の家も墓も煉瓦に
家跡をつなぎるるのは石畳 石は形をたもちてならぶ
半日をめぐりきたりて一休みアンテーカーのパン殊更うまし
傘形の松が緑にならぶ道 アンテーカーの風明くぬけゆく

坂上直美

内憂外患

・天

さまざまなことあり籠もる部屋に内空も曇りて風も騒立つ
人影のなき街となる如月の末の一日雨降り出だす
ただ寝なんやさしき闇につつまれん世の憂きことをなべて忘れて
春近し君の病のやや癒えて外に出ずれば沈丁香る
憂きことの数々あればロゼワイン一本空けぬ少し明るむ
嘆くことなかれと咲ける八重桜空も青きに何ぞ憂うる
花びらの零るる真昼春は春人の世界は滅ぶとしても

坂出裕子

沈丁香

・洛

大切にしてゐたはずの沈丁香こんな大きな木なのに枯れて
もう一度頑張らむとて芽を出だしその芽さへ枯れ芽のまま枯れて
伐りおとす決断つかず枯れし木を枯れたるままに冬を越させて
春来れば芽吹くかもとの空頼みたののままに枯れてむなし
重いから持つてと共に買ひ来たる娘との思ひ出香る木なりし
よき香りしてゐると婿がよるこびし沈丁香枯れ申し訳なし
あきらめも大事と教へくれてゐる夏の炎暑に枯れたこの木が

佐久間 晟

日乗(三三)

・湾

何のこと心の萎えに甘えてはそを盾として歌が弱るとは
これからが真のわが歌の現れん見栄も欲望もすべて切り捨て
午前三時起床、香川師の教えを守り居るこの情熱は未だも消えず
よくもまあ厳しき修練に耐えしもの卒寿を既に過ぎたる今も
常にただ微笑み見つめる師の写真これに圧されて続く午前三時起床
湖の隅に息づき己が歌を作り続けよとの教えは今も
人に見せる歌は必要無しと言われ守り続けしこの七十年

佐久間すゑ子

同行二人

・湾

春の雪ほろほろと降りかかる同行二人の背なの文字にも
香川師と同行二人のさまを見せ佐久間晟の終の姿は
人知れず心の奥に春の雪ほろほろと降り継ぎ止まず
胸の奥に空洞が又も出来たのか時折それを掻き混ぜる夫
写真に見し香川師の巡礼姿祈りの奥を懐かしく思う
胸深く思いに沈むわが頬の涙拭くがに風寄りてゆく
日毎日毎何の怖れに苛むや道義なき若きは歳の差のみならず

佐藤道子

空しさ

・甲

目覚むれば忽ち消ゆる夢の中かすかに残る夫との旅よ
食器ひとつ足りないままに洗ふこと違和感となる夫逝きてより
間違へて四つに切りわけ野菜煮る今は三人と淋しさ募る
朝々の散歩に亡夫がついて来るほころぶ桜見にいきませう
ぐちばかり歌とは言へぬ七五調いつまで待てば歌となるらむ
より添ひて寄り合ふが常なりき何事もなき時の尊さ
お下がりの方のセーター暖かし在りし日のこと甦り来る

鈴木結志

茶点て

・福

釉薬の雪降る縁に窯変の茶碗本阿弥光悦の作
魯山人作逸品の志野茶碗写真にあれど胸に迫りぬ
茶を賜う侘びの心を育める「和敬清寂」念込めて書く
「相客に心せよ」とう言の葉に茶の風流が人の和を生む
羽織袴姿に孫の茶を点てる茶筌さばきの技に見蕩れる
茶を点てる一期一会の孫の念くみて思いを深く味わう
精込めて孫の点てたる茶を汲みて朝の出発ちすがしみ足らう

関根榮子

土鈴

・埼

人あらぬ社の桜しんと咲ききりおれば神の気配す
茫として見上げる桜何鳥か翔ちて散りくるうつつ花びら
カレンダーの外出予定を五つ六つ消しゆけば日常も無になるような
出来る限り待合室も避けよとぞ眼科受診の予定日も消す
花見さえ自粛要請にせめてもとウェザーニューズのVRあり
無くていい物増えおとり蒐集の土鈴がふいにかからと鳴る
熱入れて蒐めしものをいつの間に仕舞い忘れしどの箱いくつ

関根和美

一点の赤

・埼

昨日のみぞれ今日春の陽と落ちつかぬ心の揺れのやまざるままに
可視化され浸蝕されたる世界地図一点の赤より全き赤に
人類の敵はヒトにはあらざると悟るべしさてもお争うか
ルピナスの鉢をかかえて訪う友は上昇志向をわれに促す
原色の柄まとうひと 一瞬にルイーズさんとわかる誌面よ
ミサのなきひと月を過ぎ七代を潜みいし人の渴きを想う
何とういといとしき群れよひさかたの光あふるる田に鴨あゆむ

高尾恭子

ゴドーを待てり

・大

献体のカードを胸におさめつつ徳利三合まだ酔わぬ人
五月には家に帰ると人は待つ五月になれば五月は来ない
おとうとを護らねばとて背のばす卒寿を六つ越えたる母は
らりるれる麻痺もどかしく春開けて人は唄わず杖を鳴らしぬ
新聞の記事を切りぬき叱られた叔父が施設にゴドーを待てり
赤茶けた野上弥生子の文庫本いつか読みたし もう読みかえせない
たれこめて花ひと枝をながめいるホタルイカなど酔味噌にあえて

高津砂千子

砂浴び

・風

新型のウイルスのためこもる日日から庭の草取りをする
あら草の上位三位はカタバミとハコベラそしてオランダミミナグサ
一寸ではやも花もつかモミール庭のそここ踏まれて強し
うぶ毛もつ石落の葉を茹でて煮る吉沢久子氏の料理をまねて
ばんばんにはちきれそうな豆を取り夕餉は決まりピースご飯だ
さらさらの土に潜りて砂浴びす雀のひたすらわれに気付かず
香りよきフリージアひと本びんに挿す恋知り初めし思い出の花

滝田靖子

二週間

・新

還暦の記念の温泉旅行なのに荷かずコロナウイルスの馬鹿
還暦の記念の予定も中止して還暦ぢやないふりしてよう
コロナウイルスを言ひ訳にして二週間の長い休暇を引きこもつてゐる
二週間休んでもまだ三週間分の有給休暇が残つてゐる
二週間の休暇を終へて復帰する字を書くといふリハビリをして
週に四日パートに働く病院に似て非なるわたしの日常
夕暮れの空の茜をかき混ぜるやうにへリコプターが飛び行く

竹下妙子

春の風

・霧

如月の堤歩めば葦原は葦の青芽の小さが萌ゆる
荒れ庭に春の陽さして球根が芽ぶけるふしきこころ揺れをり
散歩路に通ひなれたるこの坂のほとりに今年も佞仔助咲けり
春の陽にひらく蕾のほの紅し癒えざるものを吾はもちゐる
夕ざれの氷雨の中に佇みて傘の滴は光となれり
鉢の中根なく漂ふヒツジ草風立つ日のわれとぞ思ふ
内に外に災ひ多く心寒し終息の日は現世にあるや

田土成彦

賽銭

・宙

目に見えぬものの怖さはさりながらウイルス見えればさらに恐ろしくもしかしてあるいはよもやコロナかと咳出れば思ふ噓して思ふ宝くじは当たらないけどコロナには当たる気がする不運のわれは去年の桜見ず過ぎ今年の花時をまたやり過ぐすコロナのために玉子うどんではなく月見うどんといふ名のゆかしさは日本の文化賽銭は十円なれば産土の神に願ひは言はず礼のみ
鉄製の箱に賽銭投げこめば恥づかしいほど大きな音す

田土才恵

コロナウイルス

・宙

掻き立てる新聞・映像猛りいるウイルスニュースにやりどなき日々姿なきものに怯えて過ごしやる春の宴もすべて失い懸けて来しイベントへの期待失いしコロナウイルスの惨に蹲るペディキュアをしてみる今宵たまさかのコロナ騒ぎに生れたる時間忍び寄る不安の今を離れ住む人と電話に繋がらんとす
コロナウイルス立ちはだかれは任務地に戻る手立てを君は失う形なきものに怯える晩春の遅き夜空を近づく一機

玉井綾子

休校の門

・羊

二月の営業時間の変更と休校を聞き駆使するスマホ
学童保育より帰る子どもに出くわして「ママ」と呼ばれる休校の門親からは教わらぬと言う小三は学童保育士に割り算習う
学童保育へはママが休みなら来ぬように言われし吾子の探るまなざし
学童保育に登録出来ぬ子の家は外出自粛で相換部屋と化す
休校中、子の体調を聞く電話受け担任とはなし続かず
週末の外出自粛で買い置きしうどんの賞味期限に気付く

虎谷信子

拾遺

・伴

鈴蘭の葉出できぬ。犀星の詩集に 若き懊悩とどむ
犀星の詩集 鳥雀集ひらきつつ、読みかへすなり 唯ごととせむ
齡重ぬる程に ひたすらなるものの、あるを知りたり人恋ふる日日
月かげに 月震へる夜の精。その憂愁の 久しきものを
思ひ草は すすきのもとに生ふらしも。 赤柴の焰と ならむ
祝ぎ酒をひとりたしなむ このしじま。 口こもり出づ 愛唱の歌
なみなみと熱きを滴たし、酒づきを もる手にもてば、袖ほのに頸つ

中島央子

手づくり

・森

衣も食も手作りなしし戦中戦後母の使ひし足踏みミシン
五十年使はぬミシンに油差し娘はフラの衣装を縫へり
木蓮の白きがこぞり指す空ゆほどろに淡き雪の降りたり
ありありて想ひは常に武蔵野の木洩れ日やはき雑木の林
ふはふはと午後を無聊に過ごしたり相棒なきわれ「相棒」を見る
白内障手術といふ娘目も耳も達者なわれの照る日曇る日
転居せし友の消息絶えしまま届きし葉書の文字はふるへて

中島義雄

木苺

・岡

木苺を食む素直さに浸るとき彼の友も彼の友も泉下に遠し
甘酢ゆき木苺の香りにほんのりとま乙女なりし君の唇
覚東なき脚踏みしめて掘りあげし筍二本が今日の働き
さくら花覆へる街を行き来して人はマスクの中にももの言ふ
びらびらと雲雀が啼いて駆け昇る空より降らすかコロナウイルス
宅配のトラックが荷に掠め来し涙ぐむことき山桜一枝
ウイルスを洗ひ去りしや雨あとに終夜を燃えて眠らぬさくら

永塚節子

延命菊

・銀

爆音を轟かせつつ降り立てるドクターヘリを待つ救急車
交わらずの検査結果に手を合わす鎮守の杜にうぐいす鳴けり
生徒らの声の聞こえぬ校庭ははくもくれんの花びらばかり
家に隠る雨の一日両肩にずしり重たきコロナウイルス
プランターに植えこむ花を思いつつ彼岸の中日土を起こせり
いささかの気分転換はかりたくブルーデーじー三株購う
色に魅かれ求めたる花別の名は延命菊とうブルーデーじー

萩葉子

雪花墨はじき

・銀

せせらぎの桜花びら水底の影ともないて何処まで行くのか
葉桜の一樹あおきて背空の眩しさに会う 卯月なかばに
水底を走る花びらの影に追いこされている 淋しい
托された事のない用を頼まれて知った些細なひとつ
今泉今右衛門展人少なければ「雪花墨はじき」の説明受ける
十四代今右衛門の四季花文花瓶の前言葉なく頷きあいぬ
一期一会か 雪花薄墨墨はじき四季花文花瓶みんなに見てほしい

白子れい

初めての花

・洛

早朝の散歩はなすもその後はコロナ恐れてテレビと読書
コロナウイルス恐れおそれ籠る日々読書続けば眼のおもし
初めての花に会いたり疎水べり植えられたるは緋寒桜と
蘇芳色の蕾と見しは小さき花染井吉野に先立ちて咲く
疎水ながれ桜満開となりたれど驚いまだ声のあらざり
お茶会も短歌会もなべて中止なりしじみ独りの吾と向きあう
九十年余いきて初めての花に会う出会い求めてまだまだ生きん

ばばりょうこ

表裏一体

・鹿

弓なりの国に生れても矢をつがう事はならじと日の本の民
ためらいもなく表裏一体をさらけ出す私もその人間のひとり
何となく人恋しくて辞書めくり言葉せめぎあうなかにまぎれたり
「妻が居れば段取りもよく運ぶのに」その夫は亡妻の葬儀に喚く
裸木の林は長くつづきいて影をもそよがす早春の風
自らのお命殺めし理りを時経て知りぬ君の昇天
「仏の座」庭に咲きましたに在りし日の眸うるわしきかけろうのため

浜谷久子

長靴

・地

馬鈴薯の植え付け間隔まちまちに子の長靴の小さくあれば
畑仕事手伝う子らに用意するやり甲斐明瞭コロナ休校
川土手を登り下りして休校の子らは時間と身を弾けさす
傘立ての隣に並び冬を越す蟻螂卵の小枝が二本
春来れば畑野に戻そう蟻螂の卵鞘小枝を鳥から避けて
黒ずんでくる卵鞘の春まぢか蟻螂の子のあふれ湧く日の
歯の痛み抱えてコロナに立ち向かう守れるという自信もなくて

浜本芙美

それぞれ

・夢

門の辺に呆とし空を眺むればすぎゆく人の不審げにみる
炎群だつ紅シクラメンのプレゼントよせゆくわれの額をてらしぬ
眼科へとくれば眼科もこみていつ幼子、若人、老人それぞれ
朝の水仕終えてひとときほっとしてきかんシャトーマスの映像の前
南天の三つ四つはかなき赤き実の果敢なきままに時去りてゆく
午前二時鹿の親子とヒグマの親子の映像をみて再びねむる
わがからだ勞りくれてこのところ遊行の誘いもないのもさびし

檜垣美保子

はなびら

・昴

オリブの小枝にとまりゆれているメジロの二羽よめおとか友か照る翳るくりかえず朝の黒き屋根見つつ電話のことばかなしむ今日せねばならぬことにはあらざれどこぼれし花粉を拭う夜の更け上げ潮の川を遠見すみどりなる水にいだかれただよう一羽雨あがり空地に水の陣地ありふいに降りくる桜はなびら欄干のさくらはなびらとびたんとびたんとしかすかにふるうわたくしの記憶になくて山道に月見草摘みき友の記憶に

福田庸子

山裾に

・今

渡良瀬と利根を越しきて平らなる野に青麦のしみわたりゆくいつの間に声ととのへしか突然に鶯鳴き出す二十日も早し山裾に梅ほろほると一族の墓寄りそふは我の憧れ端を染め入道雲となる夕にまどはされたるいまだ弥生ぞ唐突な一斉休校日通勤をひかへし世代に道しづかなりバイパスをゆくエンジン音減るあした一斉休校日を母らは家に咲きいそぎし花見しあした突然に逝きたる人は笑顔のままに

藤田美智子

アクア

・新

除染土を運ぶトラックにはさまれてわが乗るアクアは小さく息する掘り出され貯蔵施設へゆく土はひさびさにかぐ春の匂ひを咲き初めたる一輪に見ゆ待ちきれず舞台袖より顔を出す子がさくらばな間に真白し死者数の百人を超え増えゆく日目を背き目の猫を抱きゐし長欠の少女は今をいかに暮らせる賈めたつるわが声われに返りくる空気乾きたる夜の寢室口紅を引きゐるわれも搬られるむ前の車に〈録画中〉のシール

藤森巳行

マスク

・銀

予定表に空白の日日多くなり憎し新型コロナウイルス朝八時ドラッグストアに人の列マスク求めて開店を待つ保育園に出かける孫にマスクさせる「息が苦しい」とすぐ外したり何事も凝る妻なりし夜なべして手袋ならぬマスクを作るマスクして友を訪ねる奥さんが「どなたですか」と怪訝な顔する外出を控へる日日なり高齢で持病あつても今日を生きゆく全世界の軍事情無くし万病を癒す薬の開発願ふ

船田清子

確かなる春

・天

ホーケ? 聞き耳立つるしばしの間 ホーケキョと確かなる春墓参り君の眠れる生駒嶺に鶯の声をちこちさやか朝毎に二人楽しみしうぐひすを君や誘ふわが目覚めにと待ち待ちし隣家の桜をとめこの恥らひめきてほほみ初むる車窓なる公孫樹の芽吹き枝々に整列したる新人生めき萩・あざみ模様のカーゼハンカチを可愛いマスクに手造りなさむたうたうと寄せ来る海鳴り夢に聞き命の流れ若返らせむ

牧雄彦

京・愛宕山

・大

遠く見る大文字山そのふもと姉の眠れる墓所はいづへぞ昨日の雪いまだ溶けざり山道をきしきし音をたてて踏みゆく北山杉の太きが根こそぎ倒れるおとし襲ひし台風ゆゑ頂きに大きみやしろ鎮まりて時にこずあゆ雪落つる音御社に人影はなし拍手を打てばひびきて神を呼ぶべし爪楊子のごときがまつすぐ立ちたるは京都タワーか夕日にひかる雪がづく北山杉のなだり縫ひこころ滑らに山を下りぬ

松浦 禎子

飛鳥びと

・羊

宮本 靖彦

連翹の花

・凌

夫婦石に設う宇陀のならわしも国のはじめの土の記憶か
 大宇陀の山より怒濤の雨流れながされゆきし『土の記』を読む
 桜井市高家とのみのアドレスに届くひとありき栢木先生
 栢木先生生れ育ちし桜井市聖観音の聖林寺まで
 大宇陀に通いて講じし物語源氏の君のころとなりて
 遥空の弟子を任ずる飛鳥びとあたたかかりき栢木先生
 近江先生栢木先生と共にせし万葉の旅何ぞゆたかに

松永 智子

落日

・嵐

うごくものなにもなくして空とほし衝の音のふとも絶えたり
 ゆくりなく見たる落日三月の終りにちかく沈みゆく見る
 夕焼けの空はるかなり高くしてなにもなければただ仰ぎたり
 衝の音ふとも絶えたり流れゆく雲あり春の昼ふかくして
 ひとありて並び見たりきことばなく八月終りの大き落日
 燃えながら沈む夕日を見て立てりことば持たざるものの如くに
 病院の屋上なりき並び立ち見たり落日ことばなきまま

三浦 好博

マーチ

・鏡

痛きまで山河乾きて雪のなき雪国車窓に過ぎて行くなり
 帽子脱ぎ優先席に座りたり喜寿相応の頭をみせて
 悪銭は身につかずなれば考へる親が残せる財も悪銭
 思ほえば我らも無駄に使ひしよ親が残しし財産その他
 桃の節句電話の日また耳の日にて難聴の耳ほじくつてゐる
 口ひらく度に確かに顎が鳴る喋りすぎではないかね妻よ
 農耕の神の三月マーチとふ行進曲の早さに過ぎぬ

のびやかな呼出し行司の名乗り声空ろな館内漂とし響く
 孫合格と明るき嫁の声を聞くコロナに世界揺れうごく朝
 花の名を教ふるスマホのグーグルレンズ君の心を読む日も近し
 クラスター・オーバーシュートにパンデミックこは日本だ。国語を使へ。
 街川の三段の階に影落す桜満開子等の声なく
 あな狭き樹間に生ふる連翹の黄のまぶしかり春はあけほの
 隠しことば記憶のあそび手に負へず窓越しに見る連翹の花

三好 聖三

田舎日常

・伊

大根の匂もそろそろ終わるころ関取様の株残りたり
 蒼天にシロナガスクジラが浮かびいる今日より温くなるという朝
 やまざくら咲きこぼるるを我が妻の里でははつか雪が降りたり
 おのずから背中まるめていたるらし野中の道に蟻を追うとき
 いつまでも終わらぬ戦後自らを裁けぬ国のひとりおのれも
 このごろの渡辺いっけい植染めの演技のありて喜ぶわれは
 あしたから桜吹雪を浴びながら蛭を潰して穏やかならず

御代田 澄江

春告鳥

・茨

本屋への道すがら聞きしと鶯の初音を吾子はわれに告げける
 吾娘に造りし木目込の内裏雛人形古りても飾り四日にケース覆ふ
 「フティージェッジさん撤退だつて」何のことテレビ合衆国の選挙の話
 凍てし夜に取り込み忘れ鉢の葉を氷らせし吾のふがひなき許せかし
 われと我が駄目さ加減を発信し少し軽くなる今日の我かも
 買ひ占めし人居るからに日本国産のペーパーなるに店より消えぬ
 ササニシキにほとんど恋をする私ササニシキ炊きトリ釜飯供ふ

茂木 斌 とんびの空

・埴

山下 雅子 閏年

・習

上昇気流の空はとんびのパラダイス翼いっばい広げ輪を描く
 ひさびさの湘南の海定番のとんびの影のひとつならずや
 人界のコロナ騒ぎは何のこととんびはゆるり浜風に乗る
 「門松は冥土の旅の一里塚」傘寿のわれは八十里過ぐ
 牛久沼「牛久はうな井発祥地」ガイドに聞けば唾の湧きくる
 アイフルのCMなのに目葉のCMかい？と妻の幸せ
 虐待を和英に問へば Cruel Treatment なり狂ふへるかも

もとむらしげと

読書会

・そ

山野 幸司 風

・沖

六人で始めし小さき読書会「明日は稲刈り」と連絡のあり
 月一の読書会の日近づけば棚より古き本を取りだす
 昔読みし本をめぐれば鉛筆にて若き愁いを書きこみし跡
 人生論にミステリーあり絵本あり持ち寄り本のその人の色
 人生の岐路に立ちしとき救われしキルケゴールを語る人あり
 二時間の会が終わりに語りきらぬこと語りつつ階段くだる
 薦められし本を読み終えわが世界一つ広がりしと思う喜び

八乙女由朗

白鳥事件

・柴

横田 敏子 新型コロナ

・福

明治維新にわが町の殿自書せしかなしき秘事は残し置くべし
 仙台藩降伏ありて四十日敗戦の気の荒るるを覚ゆ
 東北に來たりて威勢誇りたる西軍の横暴盛りなる時
 白鳥は神の化身と仰ぎつつ社に祀りきたる民の世
 上名生横橋附近の大堀に家中四名雑魚とりて居ぬ
 白鳥狩りせんと船岡大沼へ官軍の兵ら過ぎゆくを知る
 察知せる家中四名は身を挺し許せぬ行為と立ち上がりたり

四年ぶりの閏年の今日快晴なり東京五輪は覬のかなたへ
 リハビリ士と今日の歩行は燦々たる弥生のひかり踏みしめてゆく
 白蓮の秘むる力か春のひととき統ぶる白きけだかさ
 近々と頭上にひびく囁りのたのし気コロナウイルスを知らず
 オリンピックに恩返しせむと花々を育つる浪江の意気込み熱し
 牛と共に被曝覚悟の牛飼は浪江の生まれ仔に頬摺りす
 「九年経て柚子は今こそ花ざかり」滔々と述ぶ安倍宰相は

絶え間なく吹く風あれば伸びやかにいる鳶の静かに獲物を狙う
 喜びも悲しみすべて空の中雁渡るときまんまるの月
 正装の目白の集う庭の梅渡りて行かん春持って行く
 カラフルに咲き継ぐ花に酔いしれしヒヨドリたちのかましい朝
 姉を追い髪なびかせて妹の木陰まばゆし御衣黄の咲く
 町中に歌を響かせ支え合う歌人たちの顔ほてりおり
 君も吾も老いつつ語る娘等のこと孫の動画にしばらく笑う

帰り来て手洗いがいと洗面へコロナ疲れのマスクを外す
 強敵は姿見せずによつて来た 原発セシウム、コロナウイルス
 どの局もコロナ、コロナのニュースなり独り居なればテレビが相棒
 コロナ感染に急逝したる志村けん「バカ殿」初めてテレビに観たり
 志村けんの素顔なかなか良い男性世界に誇るエンターテイメント
 安倍首相「緊急事態宣言」すピークアウトは可能や否や
 世の中は何処もかしこもマスク姿振り向きざまのあなたはどなた？

吉永 惟昭 春愁 熊

春愁も吹きとばしいるウイルス禍人智の極みアベノマスクか
 蹠を閉じ籠り座しおる我がたつき不要不急の日々にはありしが
 コロコロとウイルス殺す妙薬の出来ていい頃エイプリル・フール
 もの憂きに鯉コクの欲しわがままを呼び醒ます雨彦の山里
 水仙に続く小花に春愁雨鈴蘭・花葎・野苺の白
 宿り木の廂の棧を争いて糞撒きて去る鳩の行方は
 健忘か学力進歩か小学のクイズ問題難解の鬱

朝井 恭子 誕生日 森

古里の弟電話に「おめでと〜」言ひ「何歳になった？」と何気なく問う
 残されて独り生きいる老い我に今年もバースデー巡り来たりぬ
 如月は母と我とが生れし月 父と夫の逝きし月なり
 息よりの明るき花束机に飾りふとしも思う花の命を
 久々に帰る古里の雪を踏む靴の跡なき真白き雪を
 雪の上につきたる弟の靴の跡逝きたる夫の跡とも思う
 子と二人連れ立ち来たる夫の墓先ずは一杯の珈琲献ず

磯田 ひさ子 光るものは 森

僧職の父を継ぐべく退社せし君の計を受く村の長より
 百年を経し宿坊と聞きしかば荷物に加へたりバジヤマに輪袈裟
 退社後の君の便りに四十に満たぬ檀家に支へらるると
 竹箒 熊手並びぬ光るものは光らせてぬし君を偲びぬ
 ただ一人自坊を守るあけくれに飼ひしや白き鳥籠まるぶ
 れんげうも椿も花の盛りなり君の手になる浄土へ送る
 福山のどんとん池の水鏡に映るか新型コロナウウイルス

市原 志郎 春が来た 萬

目鼻口から入るもの我が生命のパロメーターか
 パンデミックなどという言葉覚えたりこの頃しみじみ新聞を見る
 紅白の桃の花びら揺れており庭には来て居ぬコロナウイルス
 冬を越し木香薔薇が花つけたことの嬉しく庭に佇む
 わずかばかり庭を彩るぼたん雪春はそこまで来ているらしい
 きららきらら春の雪庭に積もり行くをじっと見ている三十分程
 珍しく朝きらきらとしておりぬ点眼鏡の向こうの春が

市原 やよひ 休校 萬

コロナ禍の日曜静まり返りいて桜に雪降る弥生三月
 尽日を雪降りしきり満開の桜テレビに大写しとなる
 休校の孫と息子のテレワーク何だか不思議な日が続けり
 日を経るも衰え知らぬウイルスのいつまで続く春というのに
 こんなにも科学の進む世にありて未知のウイルス地球に満ちる
 有名人亡くなる迄は知らざりきコロナウイルスの悲しき別れ
 部屋ごとのカレンダー一枚一枚剥がし行く四月一日雨の朝に

大浪 美雪 里山 森

冬枯れの山に煙のたなびきてあるかなきかに透りてゆきぬ
 のぞみ見る伊豆大島の薄化粧樺の丘に雪の積もるか
 菜畑に昨夜の雪の残りおり肌さす風に蕾かかぐる
 木木の末ほのか赤める里山に人の影なくモーターの音
 小社の回廊に坐し昼餉取る里山の神も共に召しませ
 満開の菜の花畑を前にすえ桜咲き初むきさらきもちの日
 濃き色の河津桜を一輪ずつ蜜吸うめじろ逆立ちをして

奥田陽子

赤き花

・羊

おさな児の描きし絵にて涙ぐむ吾となりしをわれの見ている
 おさな児の描ける花のふとぶとと心ひらかん俯くころ
 花びらの力つよきを見つつ過ぐ赤き花なりいっぽんの花
 白粥のふつつ煮ゆる時を待つ窓より樹樹の芽を追いながら
 桃の花いだき歩めりこの春の雛の祝い思い得ざりし
 鉢の上にへばりつくがに咲くすみれ朝一番に言う声のする
 いかなご漁今年の不漁つたえ来てわがふるさとの春霞せん

小野雅子

解体

・羊

屋根瓦一枚一枚とりはづし建物一つの解体はじまる
 巨きなる白い袋に屋根瓦つめられトラックで運ばれゆきぬ
 氷雨降るこの日も機械の音たてて家こはしゆく男達なる
 日の当たるフェンスに座布団干してゐたお蕎麦屋さんもうここになき
 喫茶店「フレンド」ありてときときは音楽の端ドアを洩れきぬ
 嫁ぐ子の自転車磨いてもらひたるサイクルショップ思ひ出のなか
 四軒の店なくなりて平らなる地面となりぬ青空のもと

久我田鶴子

水晶文旦

・羊

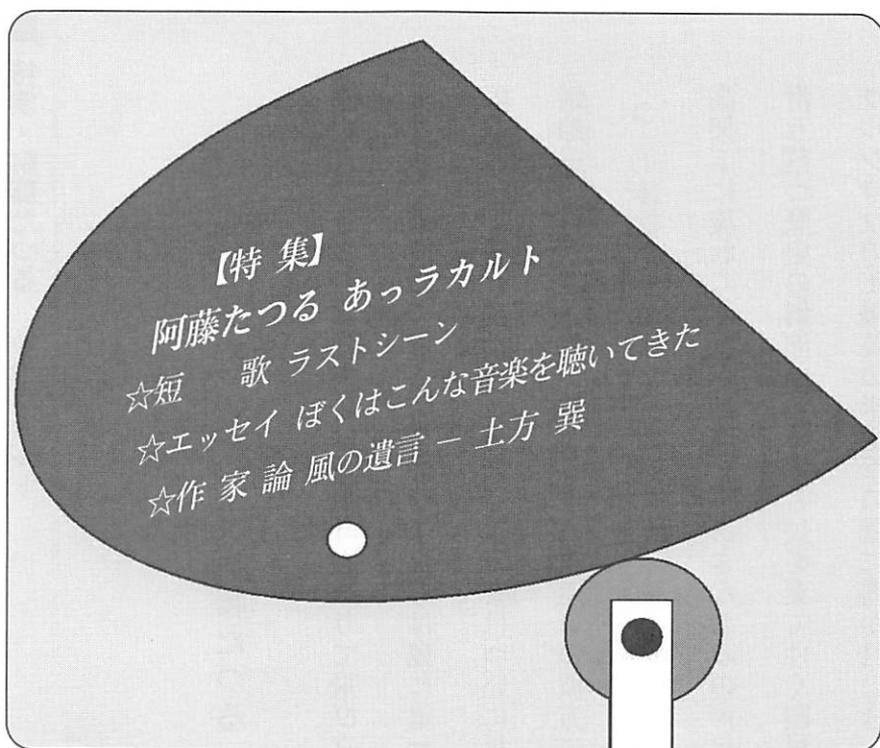
三月の西浦からの贈りもの水晶文旦まろまろといつ
 皮厚くまもられてゐる黄水晶そのなかにある種のいくつぷ
 まるくて黄いろいカプセル さうなんだ種は幾重にもまもられてゐる
 澄んだ香が冷えた空気に放たれて剥かれるときの文旦のこゑ
 清見には清見のよろしき惜しみなく口中果汁に満たしてくれる
 オレンジの切り口を見せそれだけで賑やかになる朝の食卓
 半分と思ひしころくじかれてけつきよく全部食べてしまへり

香川進の生きものの歌 20 田土 成彦

・かたつむりはうこかん前の時をもち緊張したる首の濡れゆ
 く
 『甲虫村落』より

わりと身近な存在で普段は無視して仕舞うもののだが、香川先生の歌にはカタツムリやナメクジ素材の歌が結構多い。カタツムリはでんでん虫とかほかにも多くの地方名もあるが正式の名は「マイマイ」という。雌雄同体の動物としては特異な形態を持つのはその生活様式から雌雄の出会いの機会の少なさをカバーする意味があるのであろう。食用としてのエスカルゴは有名だけれど、国内のそれは寄生虫が多く生食には適さないということだ。ご用心あれ。

さて、歌に戻って相変わらずのことだが観察眼の精緻さには驚かされる。「二時間ほどと見ている間……」という風な歌もあるがこれはどのぐらい見ておられたのだろう。たしかに動き始める直前から一帯の筋肉を覆う皮膚の状態が湿り気を帯びてきているような微妙な変化を見せる。このようなことを歌にしようとした歌人はかつていなかったであらうし、それを歌いきった歌人も香川進以外には居ない。この歌一首だけでは到底、かかることはできないが香川進のもっていた生命観とでも言うものの一端をここにも垣間見る事ができる。あくまでも上から目線ではない、水平の立場を保った歌いぶりだと思ふ。



阿藤たつるさんは、第六十六回地中海全国大会（福島大会）を手伝っていたことから、地中海の人たちとの縁が切れてしまうのが惜しいと、平成三十年十月に入会いたしました。以前にも作歌経験があるもののブランクが長いことを随分気にされているようでしたが、どうしてどうして豊かな語彙を武器に、みごとな作品世界を展開しています。散文は、地中海誌平成三十一年三月号の〈福島発・風のたより〉、私的には、メール（ある女性思想家の自死をめぐる資料を無理やり送り付けたことがあります）いずれも確かな概念使用と認識とを返してくれました。

・ 傾く世を歩き遊びてなお学び小さき声を吾もあげたし

ご自分から人に話しかけることは苦手なようですが、ここに彼の〈風姿〉があると思われます。

（三好聖三）

■ 特集・阿藤たつる あっラカルト

ラストシーン

阿藤たつる

園庭に朝日満ちたり白鷺は線量計を蹴りて飛び立つ

実りゆく果実のごとき時をもつ子どもは鬼に追われて飽きず

隠れん坊に誘われたれど面妖な鬼の姿はついに見えざり

蜻蛉追い材木置き場を駆ける子の鉄道草の彼方に消えぬ

へご正体様が来るよ／＼と囁す子どもらの影の満ちおり夢の中なる

高架下に流れくる歌「冬隣」ちあきなおみの声は宙そらから

滑り落つ歴史の斜面ゆるゆると民を棄てゆく国民国家は

ワルシャワの工場跡の半地下の壁に書かれいきへゆっくり働け

仮面舞踏のダンスホールに夜が更ける踊り続けよ踊らされずに

ルカーチの存在論を追いし君 美空ひばりと同病に逝く

耳だけをしばし電柱に隠し置き路地に洩れくる声を聞きたし

ほんとうの終着駅の標示なく常磐線は全線開通す

たもとまで辿って行きたい虹の橋三月十一日の空に架かれる

耳鳴りの底より届く伝言の〈低気圧来る〉は違うことなし

ひとつすればひとつ忘れて抜け落ちるプラスマイナスゼロとは言えぬ

チリリチリ頭蓋の奥に音のして雪なき斜面に耳澄ましおり

幾年を万朶の花が飾り来し樹影はもはや川風に消ゆ

肉体の溶けて宇宙に化してゆくラストシーンに風吹き止まず

土方ひじかたは稲架はさの高みに腰をかけ遠き集落の声を聴きおり

身の内にことばの内に降りてゆけ 吾に届きし〈風の遺言〉

特集・阿藤たつる あっラカルト

ぼくはこんな音楽を聴いてきた

阿藤たつる

私には音楽的才能がまったくない。ほとんど音痴と言っているし、楽器も何一つまともに演奏できない。そんな私だが音楽を享受する能力だけは与えてもらっている。誰でも音楽は好きなのかも知れないが、私にとってはかけがえのない力だ。

小学校の頃、日曜日に聴くラジオのポピュラーヒットパレードが楽しみだった。ザ・ビートルズの登場は今までにない音楽との出会いだった。一九六三年、曲は「プリーズ・プリーズ・ミー」だったろうか。

中学校はグループサウンズ(GS)の全盛期だった。ザ・ジャガーズのコンサートにも出かけたことがあった。やがてGSが影響を受けたロックなどに興味は移っていった。

高校では本屋、レコード店、喫茶店に入り浸るようになった。七十年前後は、政治的な活動にも関わりながら、音楽や文学に熱くなった時期だった。ロック派を標榜しつつも、「唄の市」というフォーク・コンサートにも出かけ、RCサクセションの忌野清志郎や泉谷しげるの歌に感心して帰ってきた。洋楽から

津軽三味線や民謡まで何でも聴いていた。次第にビंक・フロイドなどのプログレッシブ・ロック系を聴くことが多くなり、フランク・ザッパなど前衛的なレコードも買うようになった。

七十一年八月には、ビंक・フロイドの初来日公演となる野外イベント「箱根アフロデーテ」に一人で出かけた。曇天の夕方に彼らの演奏が始まると、山から霧が流れてきて幻想的な雰囲気包まれた。奇跡的な場面に立ち会えた充足感があった。終演後は大変な人の波で下山のバスになかなか乗れず、横浜までたどり着いたのは翌朝だった。

卒業を前にジャズ志向が強まっていく。きっかけはザッパのレコードから知ったエリック・ドルフィーか。通った店のなかにはジャズ喫茶もあって、ジョン・コルトレーンやチャールズ・ミンガスなども知ることになった。

高校卒業後の十年間はほぼジャズとジャズ喫茶一辺倒だった。大きな契機となったのはオーネット・コールマンに出会ったことだ。ある晩、ラジオ番組で曲がかかり、アルトサクソフの音に即座に心を打ち抜かれた。京都に住むことになり、「ブルーノート」や「しあんくれーる」をはじめ市内のほとんどのジャズ喫茶を巡った。本拠地と定めたのは河原町三条の「ZABO」だった。地下一階の、ほぼ黒で統一された内装のL字型の空間。予備校に在籍しながら、コーヒ一杯で一日五、六時間はそこで過ごすようになった。「いっそ働いたら」とスタッフからスカウトされるほどだった。大学生になると、さすがに半日以上も過ごすことは減ったが、やはり足繁く通っていた。集中して聴いたのは、欧米のフリージャズ系が多かった。雑誌からリストアップしたノートを作り、聴いたレコードはチェックしていっ

た。圧倒的な音の渦にセシル・テイラー、ソプラノサクスの探求者、ステイブ・レイシー、個々の奏者の音と間の生む凄み、アートアンサンブル・オブ・シカゴ、他にもドン・チェリーなども生で聴いた。欧米に引けを取らない面々が揃う日本のフリージャズもよく聴いた。山下洋輔、沖至、富樫雅彦、高柳昌行、阿部薫などはライブも素晴らしい。この時代で最も感銘を受けた演奏は富樫雅彦とステイブ・レイシーのデュオコンサートだった。開演前にエレベーターで富樫雅彦と一緒にになり、彼の存在感に緊張したあの数十秒間は忘れられない。

私は音楽上の理論や技術についてほとんど知らない。反応するのは〈音〉に対してだけだ。もちろん、その時々自分の置かれた状況が〈音〉を色づけている。ジャズを聴く行為は大袈裟に言えば世界との対峙だったように思う。ZABOのシートに腰を沈め、自分の内へ内へと下降していった時間の価値は不滅のものだ。「脳内散歩」と当時は称していたが、散歩どころか自分の無意識の層に音群が侵入してきて、あれよあれよという間に攪拌されてしまう場合もあった。私はそういう音楽を現在に至るまでこよなく愛している。

様々な音に出合いながら私が発揮してきたのは、楽曲、演奏のジャンルを問わないオープンな受容力だった。最も先鋭的にフリージャズを聞き込んでいた学生時代でさえ、岡林信康や中山ラビ、豊田勇造のフォークや愛歌団などブルースのライブを聴いていたのだ。その後も世界の民俗音楽や嘉手苺林昌の鳥唄をはじめレゲエやアフリカ音楽などその土地から生まれた音とリズムにも耳が向いていった。それらの演奏会やライブにもよく出かけたものだ。

現在は、京都、東京など大都市でもジャズ喫茶は姿を消していく一方だ。旅先では出来るだけジャズ喫茶を訪ねることになっている。一関や仙台、山形、新潟、横浜、神戸、福岡などでしょうかりとした音に出会うと喜びもひとしおだ。若い頃と違って、自宅にもそれなりの再生装置とかなりの数の多様な音源を揃えてはいるが、今でもジャズ喫茶ほど日常を超えて多様な空間と時間に誘ってくれる場所はないと思っている。

渡仏前の沖至のライブを北大路で聴き、自転車の後ろにZABOのKさんに乗せて店まで帰ったことがあった。彼女が渡してくれた冊子の表紙にあった言葉は確か〈忌避する音を持つな〉だった。四〇年前のその言葉だけは遵守して生きてきたと自認している。

今、身近に感じている音楽家に大友良英がいる。彼のことは以前からフリージャズの演奏者としては知っていてCDも何枚か持っていた。しかし、彼が映画音楽、テレビドラマの音楽からノイズミュージックにいたる幅広い音楽活動をしていることを知ったのは震災を挟んでのここ十年ほどのことだ。横浜生まれで小中高時代を福島市で過ごした彼は、震災後福島に通ってさまざまなプロジェクトに関わってきた。自主夜間中学での音楽講師もその一つだ。私も機会があって、授業のあとの彼のワークショップや彼が生徒たちとともに作り上げた夜間中学の校歌の発表会に参加した。そこで大友良英の音楽、音に対する自由な感覚に共感を覚えた。彼が表現者として自由に音楽に向き合っているように、私も音楽の享受者としてつねに自由でありたい。

■ 特集・阿藤たつる あっラカルト

風の遺言——土方 巽

阿藤たつる

私が土方巽という名前を知ったのはいつだったろうか。東北南部で生まれ育った私は、高校を出ると逃れるように西へ向かって行った。京都での学生時代、学生会館の中庭の入り口で全身白塗りの坊主頭の裸形の男がロープに宙吊りになっていたので見た記憶がある。「大駱駝艦」という舞踏団体の公演に向けてのパフォーマンスだったようだ。私が舞踏に接したのはこれが初めてだった。「暗黒舞踏」という言葉を知っていたので、創始者と言われる土方の名前もどこかで目にはしていたかも知れない。しかし、その頃は舞踊や舞踏にまるで興味がなかった。一九七三年に京大西部講堂で土方本人の舞台としては最後となった「土方巽燐熾大踏艦」の第三回京都公演が行われたらしいが、そのこともまったく知らなかった。それから十年以上も彼の名を思い浮かべることもなく時は過ぎていった。そして忘れられない三度の土方遭遇事件が起きていくことになる。

最初に遭遇したのは、細江英公の写真集『鎌鼬』における被写体としての土方巽である。大学卒業後、神戸に職を得て私は

さらに西へ向かった。そして最初の職場で怪人と呼ばれる同僚に出会う。彼は写真一筋で大学に八年間在籍したという強者だった。彼の影響で私もカメラをいじるようになったが、一向に腕は上がらなかった。彼には「シャッターが軽いのはいいことですよ」とだけ褒められた。気に入った写真家の写真集などを買うようになり、記憶が定かではないのだが、その時期に細江英公の写真に出会ったはずだ。『鎌鼬』は一九六九年に現代思潮社から千部限定で発行された。むろん私が見えるわけもなく、怪人の書架から取りだして眺めたのだった。強烈な印象を受けた。ページを二つ折りにした独特の造本で、暗いモノクロームの画像と深いブルーの対照にもはっとさせられたが、何よりも写真を通して「主演者」たる土方の存在感がぐいぐいと迫ってきたのだ。その後も図書館や雑誌などで見る機会があったが、最初のインパクトには及ばなかった。やがて普及版とはいえ『鎌鼬』を手に入れ、改めてこの写真集の魅力を再認識した。細江には「東北の記憶を写真に残す」「土方を被写体とするドキュメントをつくる」という意図があったようだが、この写真集にはそのねらいを超えるものが表現されている。三好豊一郎がこの写真集に寄せた詩の最終連そのままに躍りあがり、飛び降りる『鎌鼬』。

野に雷

ひとり童女の花簪

もがり困いへつむじ風

突如 地の盞は

躍りあがって

天の股間を蹴る

ムラへの闖入者たる彼らを受容する村人の表情、驚きとも何ともつかぬ子どもたちの表情も懐かしく魅力的だ。山形の舞踏家森繁哉の「鎌鼬」は土方の演じた一人の狂人が村という身体を切り裂き、駆け抜けた記録、というだけでなく、狂人や浮浪者といった境界線上の人々を受け入れ、そして共存してきた東北の風土の物語」という見方が的を射ているようだ。

二度目の遭遇は、京都・神戸の十八年間の生活に自分なりに見切りをつけて東北に戻ってきてほぼ一年が経つ一九九〇年の冬だった。そのころには「鎌鼬」の衝撃も薄らいでいたのだが、映像ではあったものの彼の舞踏に接したことは一つの事件だった。NHKのETV8で放映された土方の没後四年の追悼特集をたまたま見る機会があった。土方は一九八六年一月に五七歳で亡くなっている。タイトルは「風の遺言―舞踏家土方異のめざしたもの」である。「肉体の叛乱」はあまり印象に残っていないのだが、「抱瘡譚」、そして何より「東北歌舞伎計画」と題された舞踏に目を惹きつけられた。舞踊(ダンス)のイメージとはほど遠い、異様なまでに腰をかかめ、蟹股で重心を低く、沈み込むように身体を歪曲させる舞踏がそこに映し出されていた。ここに提示された東北と日本人の身体の有り様は私を揺さぶるものだった。自分の幼年期の記憶を少し探れば、腰の曲がったじばばたちが土を踏みしめるようにして地道を歩き、田畑で農作業に打ち込む姿を思い出すことができる。しかし、私は自分の中に〈東北〉を意識せず、むしろ地縁や血縁を疎ましい

ものとして向き合わないでおこうとする意識が働いていたように思う。そこを突かれた気がした。自分の根を掘ったことがあるのか、と。私は舞踏そのものについては、土方の舞台を直接見たことはなく、いわゆる舞踏公演すら見たことがない。強いて言えば、土方と親交のあった森繁哉の舞踏を目の前で見たということぐらいである。山形の大学に彼の講座を受けに行つたときのことだ。終わり近くに彼は顔に薄く白塗りをすると、粗末な衣をまとい、テーブルを舞台として踊り出した。かがみ込んでのゆっくりとした動き、硬さと柔らかさ、伸びと歪み、その動きから目が離せなかった。私の直接の舞踏体験は今もってそこにとどまる。

三度目の遭遇。それは「風の遺言」を見たことで改めて土方異が気になり、遺文集『美貌の青空』(一九八七・筑摩書房)を手にしたことだ。彼の文章との出会いである。書名にある「青空」は「鎌鼬」の青いページを連想させた。彼の文章の特徴をどう伝えたいだろうか。曖昧さを避けメタファーも含めて意図を正確に伝えることが文章表現の目的だとすると、彼の文章はそこから大きく逸脱していくばかりだ。どこを取り出してもいいのだが、同書に収められている『犬の静脈に嫉妬することから』(一九七六・湯川書房)の一節を引いてみる。

人を泣かせるようなからだの入れ替えが、私たちの先祖から伝わっている。先祖の足は四本である。袴を着けさせてみればその所在がはっきりしてくる。脚の裏には土、土の上には樞がついていて滑り止めの格好だ。膝の皿のあたりに支え棒が二本ついているのだ。この空間の棒と漕がない樞によって運ばれていく姿勢が、貧相な印鑑体である。

彼にしてはかなり具体的な表現で幼児期の体験や家族（母、父など）のことが描かれている文章だ。しかし、一読すればこれは彼の舞踏の書だと気がつく。ただ、様々な要素を批評家のように読み取り整理しようとする欲求を私は持っていない。この文章で言えば「人を泣かせるようなからだの入れ替えが、私たちの先祖から伝わっている」、この一行だけでも私には十分なのだ。彼の文章は言葉が孕むイメージが次のイメージを連続的につぎつぎ生み出していく。おそらく本人にも取捨がつかないほどに。だから読み手はどこを切り取っても自由なのだ。彼の最初の単行本である『病める舞姫』（一九八三・白水社）は、時系列的には遺文集所収の『犬の静脈に嫉妬することから』より後に書かれている。ここでも文章はあまりに感覚的で、論理的な筋道をたどる試みは無効と思える。また長大な散文詩のようでもあるが詩ではない。（とは言え、未発表草稿の断片を読むと詩行に見えてならないが）どこを開いても、どこから読んでも魅惑的（幻惑的）な言葉に出くわす。メタファーの連鎖がもたらす迷宮の不可思議さ。ページを繰っていて飽きることはない。

面白いことを素早く集め過ぎていたせいか、私の足もとで犬はじゃれつくでもなく、くるくると廻ったりしていた。私にも周りの空気に洗濯されて、くたくたになっっているようなことがあった。

タイトルもそうだが、ここには土方の暗く屈折した原初の心象風景が綴られている。彼は講演の中で「私は今子ども頃のしかめっ面をもっとも大事にしている。そのしかめっ面を今こそ表に出してですね、私の中に潜んでいたものを堂々と表に出

して、子どもの頃の世界に近づきたいと思う」「ところが、みんな外側へ外側へと自分を解消してしまう」と語っている。また、未発表草稿には「自他の分化以前の出会い（沈理の出会いだ）の関係の場へ舞踏は降りてゆくものです」という章句も見える。通奏低音のように聞こえてくるのは「根を掘れ。降りてゆけ。そして普遍に突き抜けていけ。自分を空っぽな器にせよ」というメッセージだ。私がどこかに置いてきた（幼少年期）、そこにきちんと還れということだ。長い間隔を挟みながら出会った彼の映像（写真・ビデオ）と言葉に私はどう感応するのか。土方の文章は、ほの暗い私の幼少年期の身体と言葉の内へ内へと自分を沈み込ませていく、錘鉛のような存在であるのかもしれない。数十年前に「風の遺言」を見た際の視聴メモがノートに残っていて、そこには「東北歌舞伎計画の最終段階は明るいミュージカルのような世界ではないか、しかしラストシーンはまだ風の中にしか聞くことができない」とあった。風の中にあるメッセージは眺めていては受け取ることができない。自ら風の中に立たなければならぬ。映像を繰り返して見ても、彼の肉体にたどり着くことはできない。しかし、彼の遺した言葉の数々は私に何かを伝えて止まない。それらは彼の肉体であり、「踊っていないわけではないのに、みんなには見えないうらい踊り」、見えない舞踏なのだろうと思われる。

ランボーのように裏切らなかつた書き手、存在的な下降によって手に入れたものを市場で取引しなかつた書き手はそんなにいるものではない。（フェリックス・ガタリ）



「好奇心」未知の事柄に対する興味

藤川 淳子

日々刺激を受けていること。私にとつては、生きとし生ける物の営みを見つめることです。

歌を作るよう突き動かされる思い、それは草花や虫や鳥や動物を観察した時に湧き上がる思いと重なります。

わが家の庭には二本の金柑がありますが、実はわずかしかつけません。夏の間に、あらかた揚羽の幼虫の餌となるからです。頼りなげな蝶が（春に孵化した個体は小さいのです）庭にあらわれると、卵を産みつけるのをワクワクしながら待つのです。薄緑のすき透った一ミリほどの卵を見つけた時はやっ／＼いつの間にか土色から緑色に育っ

た幼虫を数えることは、夏の間の日課です。昨年は、なんとこの幼虫とおんぶバッタのらみ合いを自撃、大興奮でした。

白黒のおしゃれな縞模様の小啄木鳥。小さな体に似あわず爪が鋭いのです。人の目もなんのその、飛び移りながら虫を捜す姿は、見飽きることがありません。

高い木の上で鳴く四十雀。ツビーツビーという特有のさえずりは、繁殖期の雄だけのもので知り、甚く納得。

水族館にいるエトピリカ（これが又私の体型によく似た鳥なのですが）。ガラス越しに目があった（と思った）瞬間、水にダイブ、魚の如く泳ぐ勇姿をみせてくれたのです。相通ずると感じたのは、私の思い込みでしょうかね。

『残念な生き物事典』から、ナマコの生態について。ナマコは敵に襲われると、内臓をきき出して敵が食べている間にスタコラ逃げるといふ。でも大丈夫、はき出した内臓は二ヶ月で再生。その間絶食してても問題ないとか。ああその場面見てみたい。とまあ、書きはじめるのと止められなくなるので、ここからは、話を始めに戻して。刺激を受けるためには、感性とか好奇心を磨くことが大切だと思います。

日経のコラムを一寸紹介します。「好奇心の尽きない九十歳」の長谷川氏。今も群馬県立自然史博物館の名誉館長。その方から四十年にわたって指導を受けた真鍋氏はこの恩師を「卓越した洞察力を支えるのが、尽きない好奇心だ」と評しておられる。

そうだ、人には人なりの好奇心がある。種類も質も容量も違いがあるとしても、持ち続けることこそ、元気の源なのだ、ということを後押しされたのです。

子供の頃から劣等感の強かった私が、七十を過ぎた今は、それなりの充実感を持って生活できています。自尊心のない自分から抜け出せたのはどうして。それはきっと好奇心が旺盛だったから。大袈裟に言わせてもらうなら、私を自由へ解き放ってくれたのは、「好奇心」。

自然を観察し、知識が増えてゆくと、生きとし生ける物へのいとおしさが増してゆきます。自分など何ほどのものか、と思えるようになりました。

柔らかい心で、たくさん刺激を自然から受けとる時、好奇心が洞察力と結びついてゆく時、過ぎていく時間は喜びとなり、そうだ、きつ／＼いい歌が作れる、と思うこのころです。

作品 A

(カ行)

海保奈良繁

吾が作歌

・春

吾が作歌心うばはれすくすと時の果報者ころを洗ふ
 吾が作歌八十六歳時すべり込むいのちの理^{ことわり}知りて耳澄ます
 吾が作歌下手の横好きになれた今素直になれがおかげとなりて
 吾が作歌リハビリ室に地蔵訓コトバは無辺毎まねぶ
 吾が作歌思ふだけにていつちにも自由奔放思ひ果てなし
 吾が作歌何でもありと地中海有限に無限愛づるうつつし世
 吾が作歌知らない事を知る事に旅は道連れ興味津津

角田玲子

如月の

・夢

肌をさす寒さに白き息吐きつ海のミルクの牡蠣買う夕べ
 木枯しの吹きやみし間の静か時夜明け知らせる鴉の声のする
 寒風のやみし夜半の息苦しき雨降る音のかすかに聞こゆ
 ガラス戸の汚れに気付く如月の春の日差しに待つ心の内
 五百円玉チャリンと入れる貯金箱思うに貯まらず先ほど少し
 番号に支配されてるマイナンバー必要以上に抵抗のあり
 あせらずにその日その日を恙なく今日も終えたと床に入りたし

片岡邦子

休校

・夢

清酒とたちつばすみれ丈低し新型ウイルス届かぬところ
 夕暮の菜の花畑ゆれやまず休校持て余すこともらの声
 休校にもコロナウイルス終息せず潜める処見極めがたし
 報道のマスク不足に口走る備えなければ怯えるばかり
 不気味なる新型ウイルス蔓延に春のころは倦怠きさず
 マスクして並ぶ高校生の卒業式実験室さながらの防御
 予定表に休会書き込み春場所の観客なしの大相撲視聴す

片倉ひろみ

ストレス

・湾

マンションとわが家の合間に満月が煌めくオレンジ色にウイルスを忘れ
 満月の今夜の月はオレンジ色ストロー添えて飲んでみようか
 突然の黄泉への旅立ち届きたり数日前に立ち話せしに
 ウイルスに甲子園野球は中止なり球児の落胆われも落胆
 世の中の学校は突然休校と親達の困惑、わたしもその一人
 強風に玉葱の苗が踊ってる娘は校庭での孫の卒業式
 母の日のウイルスの報道にストレスを孫は公園で遊び更けおり